

## 《解説》

It is possible that I might have placed them upon record before, but a promise of secrecy was made at the time, from which I have only been freed during the last month by the untimely death of the lady to whom the pledge was given.

1. It is ~ that... 「これは『強調構文』で、文法上の主語が、意味上の主語が、、、」なんて学校の先生が言い始めると、英語よりも日本語のほうが分からなくなって、数分も経たない内に思考停止に陥るものです。簡単にいきましょう。

“It is possible” ですから、それは“可能”、つまり、“出来る”んです。「へえー。で、何が出来るの？」それが “that” の後ろに書いてあります。

([Home](#) で戻る)

2. “I might have placed them upon record before” が、その“出来ること”なのですが、ちょっと丁寧にいきます。

まず“before”（後ろから訳して行かなければいけないのが申し訳ないのですが）、これは難しくない。“以前に”。

“record” は“記録”。その昔、CD や DVD が出回る前は『レコード』で音楽を聴いたものですが、その『レコード』が、どうして“記録”なのか、と思ったものです。しかし、考えてみれば、『レコード』とは音を“記録”したものですから、まさに“record”なのでした。

“place upon” は“～の上に置く”。“place them upon record”とい

うのですから、“それらを記録の上に置く”、つまり書き留めるといったところ  
でしょう。ここで言う“them”は、事件の経緯です。

“書き留める”と訳していますが、この場合は“（世間に）公表する”と  
いうことでしょうね。

さて、一番厄介なところに行きます。

“I might have placed upon” このように、助動詞の過去の後に現在  
完了が繋がると、“～しとけば良かった（すべきだった）のにしなかった”  
という意味になります。

今回は助動詞が“may”の過去形の“might”なので、“記録しておいて  
も良かったのだが、していなかった”ということになります。

“might”ではなく“should”を使って、

“I should have placed them upon record.” と書いてあったら、

“記録しておくべきだったのに、していなかった”という言い方になります。

なんで書き留めなかったのかというと、“but”以下の説明で、『秘密にす  
るという約束をしていたから”。

( Home で戻る)

3. from which この“which” はその約束を指して、“その約束から”

( Home で戻る)

4. freed “free”はもう日本語にもなっていると言っても過言ではないで  
しょう。“自由”です。

が、私たちが日常で頻繁に使う“自由”という意味合いは、“free”よりも“liberty”の方に近いように思います。

“free”とは束縛するものがない状態の事。

だから、『今晚空いてる？』なんて聞くときは、“Are you free tonight？”

『自由の女神』は“The Statue of Liberty”。英語だと、“女神”とは言ってなくて、単に“自由の像”なのですね。

“free”でもう一つ。

“free”には“ただ”という意味があります。

海外旅行に行って、“buy two for one free”と書いてあったら、“二つ買ったら一つはおまけです”ということ。

“おまけ”にもう一つ。

“free of charge”と書いてあったら、それはまさしく“ただ”。

“チャージされることから逃れている”から“ただ”なのですね。

( [Home](#) で戻る)

《要約すると》

事件の関係者との約束があったので、今まで公表することは出来なかったが、その人も先月亡くなったので、もう公表しても差し支えないと考えた。